

江藤悦三著

江藤清助略伝

この小著を
江藤基雄の
霊に献げる

はじめに

これは現代流行のルーツではない。明治の前半
イエスの福音を信じた一大阪商人の人生記録で
ある。彼は私の祖父にあたる。しかし八四年前に死
んだこの人に私は永い間、関心を持たなかつた。
ところが彼の生き方の一端が最近判つて来た事と
昨年暮の甥基雄の突然の死とが、私に拙ない筆を取
らせるように追いやつた。調査の時間不足のため
不完全を免かれ得ないが、他日の補完を期して、こゝ
にひとまず発表する。

一九七七年 盛夏



創立時執事 江藤清助

大阪南教会五十年史口絵写真の中に創立時執事の一人として掲載されているもの。



薩山翁太郎氏が明治四十年ころ、或る写真を元に描かれたものと推定され、江藤順蔵氏宅に現存。

第一章 前半生

江藤清助は一八三九年、天保十年八月一日、若狭國十村、現在の福井県三方郡三方町に、江戸清左衛門の二男として生れた。当時わが國では鎖國下の幕藩体制が行詰り、若狭では天明から天保期にかけて、生活に苦しむ農民の一揆が頻発していった。(山川出版社「福井県の歴史」) 清助は七才の時、大阪の船場で呉服商を営んでいた父の弟、若狭屋の養子になつた。これには当時の実家の苦しい經濟が関連していたかも知れない。若狭屋

には清助より一才年長の姉が一人あつたようである。彼が養子になつたのす、恐らく数年以内に、へんねし子として義弟の義資たけしげが生れたと思われる。(へんねし子とは子供のできない夫婦が養子を貰つたあと、ままでやきもちを妬くように生れてくる実子のことである。)

さて清助一六才の時、一八五四年はわが國がアメリカのペリーの強圧に屈して開國をした年に當る。さらに四年後には幕府は朝廷や諸藩の反対を抑えて日米修好通商条約に調印、反対するものには嚴罰を科し、その結果は井伊大老

の暗殺を引起した。一八六〇年、清助は二才の頃である。これよりの寸明治維新の成るまでの八年間は、わが國の歴史上、未だかつてない内憂外患の時代であつて、日本經濟の中樞であつた大阪は、もちろん、その渦中に巻き込まれた。青年期の清助は、家業に励みながら、その若い血潮をたぎらせた事と察せられる。その間、義父は慶応元年、一八六五年死せし。清助は二七才で名実共に若狭屋を嗣いだであらう。

明治三年、備江シメと結婚、清助は二才、シメは二十

3

才であつた。その後の約十年間は、清助にとつて、義弟義資の問題があつたとはいへ、生涯の中で最も平穩無事の時期であつたと思われ、固全体として、旧武士階級の反抗は結局抑えられ、日本の近代化は着々と進行し、大阪はいよゝ經濟の都として繁榮していく。若狭屋も順調に發展したと思われ、彼は子供にも恵まれ、長女モト（明治四年）長男清次郎（同六年？）二男榮吉（同十年）三男嘉吉（同十四年）四男治吉（同十九年）が次々と生れた。ただその間、実兄が明治一一年死亡している。

4.

第二章 苦難と入信の時代

清助にとつては、長女モトに続き、若狭の実父、清左衛門が明治一四年相次いで死亡した事は、彼の平和時代の終りを意味したように見える。明治十年の西南戦争後^{インテリゲン}が起つた。これを克服するためには、松方蔵相の緊縮政策が行われ、中小企業は特に苦しい立場に立たされた。清助の家業の方も恐らく苦しくなつた事である。いつぼう明治十年頃よりアメリカ宣教師達による日本伝道が熱烈に行われていたが、折し

も不平等条約の改訂を望んで行われた、いわゆる鹿鳴館の欧化政策は、キリスト教発展にも一層有利に働いたに違いない。当時横浜にあつて聖書の発行に従事していた義弟義資より聖書を贈られた清助は、明治一八年頃より大阪南教会の前身清水町説教所で信仰を学び、アレクサンダー宣教師より受洗して、既に会員となつていた。一八年一月一日、同説教所が南一致教会として独立したさい、清助は初代執事の一人に選ばれた。またシメオ、栄吉、嘉吉も同二十日受洗、一家を奉

ゲて信仰の生活に入った。清助は以後四年間、ひ
きつゞき執事に選ばれ創立時代の同教会の爲に
つくした。特に教会財政の担当者として、会堂改築
と牧師謝金(当時月二十円)の自給実現の爲に努力した
と思われる。(五十年史八、九ページ、教職及役員年表、畧史四ページ)
しかし第二の不幸は翌一九年にやつて来た。長男
清次郎の病死である。清次郎は当時京都に下宿
して、新島襄の同志社で勉学中であつた。清助も
彼に期待する所があつたに違ひない。清助の辛さ
が察せられる。また清助が、呉服商はキリスト教徒

の生業は適わしくないと考え、ミシン輸入業に
転業したのも多分この頃の事と思われ。 8

さて明治二十年大阪に「稻荷焼」別称「難波神
社の大火」が起つた。船場の中心部は烏有に帰し、
博労町四丁目の清助の家も土蔵一つを残して
焼け落ちた。彼は直ちにバラック建を急造して
再建に取掛り、さうに商売を変えて、メリヤス製造
業を開始した。(胡蝶六ページ)この事は清助の商人とし
ての気魄を感じさせるが、いっぽう、商売再建の
かたわら焼け残つた土蔵の前で、道行く人に神

の愛を説き福音を語つた。世人は彼が氣違ひに
なつたのではないかと噂したと云う。長男の死
も火災も清助の信仰を却つて純粹に、より深く
したのであるう。

第三章 プリマス派転會と死

明治二二年南教會の初代長老竹内耕言氏の
突然の死と長老手塚誠哉氏の北教會への転會
により、長老二名の補欠選挙が行われた。清助は
前川楨造氏と共に当選したが、雨氏共にこれを

9.

受けず、再選の結果高橋要助氏が選ばれた。(畧史
六ページ)清助は同年以後も會堂建築予備委員と
して、また翌年以後は牧者招聘委員を兼ねて、活
動はしているもの、(畧史七、九ページ)教會創立以來
四年間、執事として活動し来つた清助が、今、教會
が最も彼を必要としたその時期に、長老を辞退
し、執事をも引受けていない事は、家業の心配も
あつたとは云え、燃えるような彼の伝道精神と
思ひ比べる時、奇異の感を受けざるを得ない。
これは長男の死と火災の後、清助の心の中に何

10

か新しい考えが生れつゝあつたのではないか。それとも既に徳蔵が虫ばまれていたのか。

さて「先輩兄弟」三九ページ、明治三四年の5「江藤清助兄」の項に次のような文章がある。「或る日、石原（久之助、筆者）兄が御堂筋の吉川湯に行かれた時、一致教会に属する江藤清助兄と出逢われた。其際石原兄は此頃聖書に由て救の道を頗る明瞭に教えてくれる人が来て居られるが、一度御宅で集りを開きたいと思ひますが御宅を拝借できませんかと問うた。江藤兄はそれはいと易い事

ですと承諾せられた。そこで一日江藤兄方に集まつた。その時の出席者の中に堀米吉兄、小西角兵衛兄等が居つた。其後、石原兄方に屬々集められた堀兄は、初め反対して居つたが遂に心啓かれた。以上の兄弟方、南一致教会を離れて主の御名にのみ集めらるるに至つた。こゝに記されている石原久之助兄とは、当時の島之内教会の中心的会員であつたが、東松雅休氏の説くプリマス派の福音主義に共鳴し、同教会員一五名と共にこの年の五月末、大挙脱会したばかりの人であつた。（先輩三八ページ）

また堀米吉兄、小西角兵衛兄は南教会において同年四月、長老に選挙されたばかりの役員であった。(鬼史十ページ) また文中の「聖書に由て救の道を頗る明瞭に教えてくれる人」とは、当時大阪滞在中の兼松雅休氏に間違いない。(先輩三七ページ) この事は諸記録を併せ考えて見れば、明治二二年、東京の日本橋教会で始まつたプリマス派の旋風が東京の諸教会に拡り、二四年には大阪に波及して先ず島之内教会、ついで南教会その他に及んだ史実の一環を示している事が判る。右の石原氏の

清助への依頼もその大きな流れの一こまに当
ることになる。 14

プリマス派の福音主義を信じた清助は、小西氏と共に同年末南教会を脱会してプリマス派に移つたものと思われる。(先輩四九ページ) この転会を清助個人の側から云えば、石原氏の申出を「それはいと易い事です」と気軽に引受けた心中には前述の何か新しい考え、いわばイエスの真理へより近づきたいとの願いが既に存在していたのではないだろうか。

実父と長女の死、入信と信仰活動、転業、長男の死、火災、そしてプリマス派への転向とそれに伴って起つたさまざまなトラブル。(五十年史ニページ) これらの他にもう一つ、清助の気がかりであつたのは、二男栄吉の教育であつたらう。後年その才気を縦横に發揮して、大阪実業界にその名を馳せると到つた栄吉も少年時代は、その負けじ魂の故である。うが、四年制の尋常小学校さえ卒業しない学校嫌いであつた。しかし長男の清次郎と異なり、栄吉の商人向きの性格を認め、清助は彼に商人と

してのきびしい訓練を行つた。そして時計屋になりたいたとの栄吉の志を知つて、同信の堀米吉氏の経営する心齋橋北詰の時計店へ丁稚にお願ひしたらしい。栄吉一三才の頃(明治三三年)である。堀商店に入つた栄吉は水を得た魚のように以後、商人の道をまっしぐらに進み、父清助の信頼を得るようになったと思われ。

清助は上述のような種々の心労が重なつたためである。うが、結核の犯す所となり明治二六年初めより床に卧すようになったらしい。日本

のプリマス派創建者とも云うべきブランド氏が初めて大阪入りをした同年一月一二日梅田駅に出迎えた同派の信徒達の名前の中に清助の名が見えないのは、恐らく既に病状がかなり悪化していた為だろう。(先輩六六ページ)二月二十五日、堀商店より栄吉を呼寄せた清助は、シメおよび三人の息子に囲まれ、身を起させ、鏡で自分の顔を眺めて死期の近づいた事を認め、苦しい息の中から辞世の一首をゆつくり口ずさんで書き取らせた。その声は僅かに聞き取れるほど弱か

つたけれども、その内容は、数々の人生の苦勞にもめげず、為すべき事は爲し終えて、今や、天国の門の前にたどりついた。その人のゆるがぬ信仰の告白であつた。その一首はすなわちこれである。天国もようくこゝに近づきて

もはや憂いもなきぞうれしき

(墓碑による)

この妻子への最後の言を伝え、みずから確かめるように、二、三回口ずさんでから、静かな眠りに入つた清助は、二日ののち二月二十七日永眠した。数

元年五五才であつた。(胡蝶ニページ)遺骸は多分阿倍野の墓地に葬られたのである。現在その江藤家の墓地には、妻シメが死去した翌年(昭和一三年)長男栄吉郎(栄吉は堀商店在勤中、番頭として栄吉郎を称するようになったらしい)によつて建てられた清助シメ合祀の墓碑があつて、その背面に、右の一首が刻まれている。それにして、四三才の妻と一六才を頭とする三人の息子達を残して早くも旅立たねばならなかつた清助の心中はどんなであつたらうか。

清助が遺族に残した遺産については明白でな

いが、七年後、栄吉郎が独立して尚美堂を開業した。当初の資本金が九三〇〇円であつた事から判断すると、それはおよそ五、六千円ではなかつたかと思われる。当時の五、六千円という金額は、同じ年に南教会が南綿屋町で貸家付百五十七坪の土地を二千七百一八円五十銭で買入れている事と考へ合せると(五十年史ニ四ページ)決して小さな金額ではなかつた事か判る。明治一八年以後の不遇つづきのあとだけに清助の積励ぶりが偲ばれよう。

第四章 エピソード その他

江藤清助について公やけに記録されたものは現在の処、後述するやうに僅かしか見出せない。しかも八四年も前に死亡して既に戸籍から除籍されている程に古い人であるから、彼に接した同時代人はほとんど居ない。ただ既に故人となつたシメや栄吉郎、その他の人々の口を通して伝えられたエピソードがいくつか記憶されていて、清助の人柄を知る材料にはなる。しかしその伝聞がいづ、どのやうにして聞き取られたものかが明

白でない上に、同じ事柄と思われれるものでも互いに矛盾している場合があるので、信憑性しんぽうせいに欠ける点は否み得ない。また清助にとつてあるいは名誉でないと思われれる事も正確を期する為についてに記しておく。

(一) 江藤嘉祐氏(嘉吉の三男) 宅の過去帳によれば、清助には登吉(戒名 釈淨齋童子)と云う男の子があり、慶応三年九月一三日に死亡している。清助二八才の時である。これはシメと結婚する四年前に当る。この事は今の処、これ以上は判らない。

(四) 四男治吉についでも戸籍上は五男となつて
いるが本書では四男としておいた。なぜ五男となつ
ているかという理由も同様、今は判らぬ。

(三) 清助がキリスト教に関する話を聞いた或る
時、妻のシメに「こんなぼろい話は聞いた事がな
いと語つたと云う。ぼろい」とは大坂弁で非常に
得たと云う商業用語である。これが清水町説教
所で初めて説教を聞いた時の事か、(本書六ページ) そ
れとも、のちに「律法主義より救い出され、恩恵の自

由を」と云う事を主張したプリマス派に接した
時の事か(本書二ページ)定かでないが、何れにしても
五十才前後の清助が、未だみずくしい道徳的
感覚を失なつていなかつた事実を示す重要な
一言と云えよう。

(四) 清助が義父より引継いだ家業の呉服商を
廃して、ミシン輸入商に転業した理由として、呉
服屋仲間のつき合ひには飲酒がつきものだが
ら、当時の教会のきびしい禁酒のおきてに従う

為にそうしたと云う伝聞がある。いつぼう異服
屋と云うものは婦人の虚栄心と贅沢をそぐ
悪い商売だから転業したと云う別の伝聞があ
る。いずれにしても、古い今迄の世界から脱出を
しなればならぬと考えたのであろう。
ミレン輸入業、さらにメリヤス製造業に転じた
のは、恐らく教会関係の伝聞があつたから出来た
事だろうが、これにしても、思い切りの良い、そし
てハイカラな事であつた。なお明石のプリマス
派の石田庄三郎(栄吉郎の妻の父)も、入信後、家業の

酒造業を廢し明治二七年には既に製糸業に転
じていた。(先輩八三ページ) これによつても当時のキ
リスト教徒の職業選択のきびしさの一端がう
かがわれる。

(五) 栄吉の教育についてのエピソードの伝聞を
列記すると、

(1) 夜、路傍にむしろを敷いて、物を並べて売る事
を夜店を出すと云うが、十一、ニオのころ栄吉はそ

れをやりきれ、つらい思いをしたという。しかも、その栄吉を清助は物の陰から監視したという。清助にとつては、これも息子の教育であり、かつ商売でもあつたのだらう。売つた品物はメリヤスの自家製造のさい出来たきず物だつたらしい。(胡蝶四ページ)

(2) ある日、清助は栄吉をつれて紙問屋へ行き、問屋が小売屋に売るさい、丁寧に一枚ずつ数える現場を見せた。問屋は数え終ると、一枚多うございましてと云う様子で必ず最後の一枚を取った。これで買う側を心理的に安心させ、みず

から一枚得をするのである。こうして商売のこつを栄吉に教え込んだ。信仰の人、清助はまた、したゝかな商売の人であつた。

(3) 少年栄吉が鳥打帽子(ハンティング)をほしがつた時、清助が買つてやらなかつた事があつた。栄吉は腹を立て、「部屋中の畳の上につばを吐き散らしたつた。」と後年筆者に洩らした事がある。清助のきびしい一面である。

(六) 「義弟義資の問題」とは(本書四ページ)義資がいわゆ

る極道者で、清助からしばしば金銭をせびつて
苦しめた事を云ふ。養子であつた清助は実子で
ある義資にはやはりきびしく出来なかつたのか
も知れない。結局、義資は家を飛出してしまひ、東
京方面に行つて、ある夜、泥酔して、とあるキリス
ト教会の前で寝てゐるところを助けらる。そ
れが機縁になつてか、纒然、信者となり、みずから
聖書の發行業を営む程になつた。そして、かつ
ては極道で苦しめた義兄の清助に贈つた一冊
の聖書が、今度は清助一家に救いを齎らす事に

なつた。誠に奇縁と云う他はない。

(七) 明治一八年清助の家族三人の受洗が行わ
れてゐるが、翌一九年死亡した肝臟かんぞうの長男清次
郎の名前がそこに見えないので不思議である。
彼は既に同志社で受洗を終つていたのである。
るまいか。

(八) 明治二四年清助が南教会を脱会してプリ
マス派に転じた時、既に堀商店に勤務してゐた

十四才の栄吉は脱会に反対したと云う。その理由として、主人の堀米吉氏が始めの中、脱会を躊躇した事、栄吉にとつて六年來の信仰の交わりを断つことのつらさ、父清助の心境が若年の栄吉にはまだ理解できなかつた等が考えられる。しかしその後、あまり遠くない時期に栄吉もプリマス派に参加したと思われ、とに角、清助の転会はその一家の中にも一つの波紋を生じていたのである。栄吉はその後も永く南教会とは親しい交わりを続けていたらしい。

(九) 戸籍によれば清助の遺族は、清助の死後間もなく博労町四丁目から南炭屋町へ移転している。その理由は判らない。

(十) 最後に清助の肖像に觸れておく。現在江藤順藏氏(栄吉郎長男)宅には蔭山余之助^氏が明治四十年頃或る写真を元にして実物大にスケツキされたと思われ、ものとそれを更に長尾己氏が模写された油絵一枚とが残つていづぼう同じスケツキから模写されたと推定される別

の油絵が一枚(作者不詳)江藤嘉祐氏宅にある。これら三枚の肖像画の他に、南教会五十年史に掲載されていゝる、やゝ傷んだ写真が一枚あるが、その元の写真は無い由である。本書口絵の二枚の写真は右のスケツキと五十年史の写真の複写である。以上が現在の処、筆者の入手できた清助の肖像のすべてである。書については残念ながら全く手に入らない。

おわりに

この略伝をまとめるに當つて、主に使用した資料は左記の四種である。

一、大阪南教会五十年史、一九三五年同教会發行。本文では「五十年史」と略して引用した。

二、大阪南教会畧史、一八九六年同教会發行。本文では「畧史」とした。

三、先輩兄弟ら明治篇、一九七六年同信社發行。本文では「先輩」と略した。

四胡蝶、一九四二年江藤嘉吉発行。本文では「胡蝶」と記した。

右の南教会の資料は回教会秋山牧師の特別のご好意により貸与を許されたもので深く感謝申し上げます。この他、貴重な伝聞を教えて下さったり、資料調査にご協力下さった南教会の龍口氏、同じく倉橋氏、ご一家、福井県三方町教育委員会の金森氏、同信社の鈴木氏、そして親族の諸氏と家族に心より感謝を申し上げます。

一九七七年八月一五日

筆者